



愛宕さんが僕を甘やかさせて虐めて蕩けさせる
.....
テングコテング

DOJIN
R18
成人向け



僕は、頭が良い。

15歳という若さで、提督に任命され、
一週間前この鎮守府に配属された。
両親からは神童だと言われているし、僕もその通りだと思う。

長男として、日本男児として、僕はその期待に応えるべきなのだ。
その為に、提督として、この鎮守府で立派に役目を果たしたい。

僕は若くて賢い分、周りから嫉妬されることがある。
そんなくだらない奴らはどうでもいいのだが、人の上に立つ以上
対策も必要だ。

秘書官は愛宕に務めてもらうことにした。

愛想が良く、朗らかで、能天気で。

僕は少々愛想がないので、ちょうど良い。愛宕なら、周りとうまく
関係を結び、僕のフォローをするだろう。

だが、

愛宕は妙に馴れ馴れしい。
提督である僕の体をべたべた触ってくる。
怪訝な顔をすると、あの甘い笑顔でより触ってくる。

ふわふわの髪から甘ったるい香りをさせて、
ばかでかい胸を押しつけ、僕に密着する。

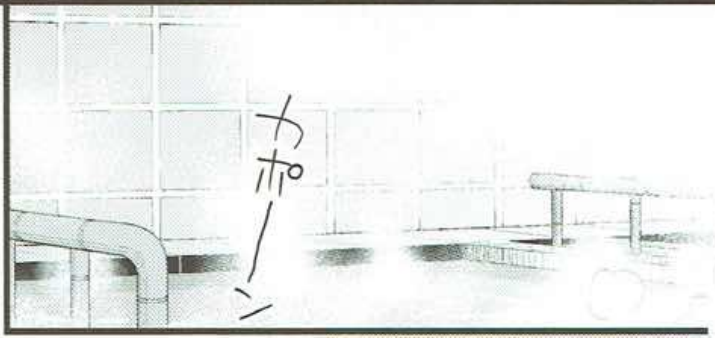
くだらない奴らなら、喜ぶところだろう。
だが、僕は違う。そんなくだらない人間じゃない。

今夜こそ、愛宕にびしっと言ってやらなくては。
僕は、周りとは違うんだと。

全く…
愛宕と一緒にだと
調子が狂う

あんなに甘ったるい匂い
させやがって…!!

僕のと全然違う…



カホー!!

ガラッ

「提督♡
今日も一日
お疲れ様♡」
「お背中
流しまあ〜す♡」

むち

「なっ…!!?!!
いいっ!!入っでくるな!!」

「うふふ♡
これも秘書官の務めよう〜
ね、提督、いっぱい泡立てて
隅々まで…洗ってあげる
きつとね…気持ちいいんだからあ♡」

ごく…
気持ちいいの…か
「そ、それより
なんだその恰好は!?!」

「これ〜濡れてもいいように
ちよっと頑張っちゃた♡
どうです?似合うかしら〜?」

「うわ…乳首…
いや、にゅ、乳輪はみ出て
いつも着てる服の下
こんなのが隠れてる
のが…」

むち

あ……
気持ち……いい

しゅん

しゅん

しゅん

「提督♥
目染みてない？」

「ああ……うっ！」
大丈夫……すぐ……
下から間近で見ると
大きくて……
泡で濡れてるから、
なんかツヤツヤ
テカテカして……

「柔らかいのか……？
重いのかな……
どんな感触なんだ……」

たぷん

たぷん

しゅん

しゅん

「……提督♥
じゅつと見て……うふふ
気になるっ？」
「いっやっ！別に！」

「提督の命令なら……
いっやばい♥触って
揉んで……いいのよ♥」
「うあ……め……」

たぷん

「あん♥」

「命令!!」

「んもう
意外と
おっぱい……好きなのですね♡」
もみゅ もみゅ

「だ・黙って
命令をき・聞け」
愛右のおっぱい……
やわらか……っ

ズ……
ズルズル

乳首っ!!

「あん♡
はみ出ちゃった……♡
提督、乗せちゃって
ごめんなさいい」

「お詫言……
先っほも♡
提督の好きにして……
くださいね♡うん」

しゅん
たふ

しゅん

おっぱいの重さで
息苦しいのに……
頭も気持ちよくて
……どける……

もみゅ

しゅん

もみゅ

「んっ♡
ちゅっちゅ♡
ちゅっちゅ♡
ちゅっちゅ♡」

「んっ♡
ちゅっちゅ♡
ちゅっちゅ♡」

「おちんちん
気持ちいっくい？」

「提督のおちんちん
カチカチ…♡うれし♡
わたしの乳首も…
かたくなってるの…
わかります？」

「きもちいいと
…勃っちゃう♡
提督とお揃い…」

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

「ん♡提督♡イキたい？
ぴゅっぴゅっしたい？」

「あたごお!!」
きもひいっ!!

「ぴゅっぴゅっするまで
手とめないから♡
きもちよろしく
いっちゅっ♡♡」

ビュルッ
ビュルッ

ビュルッ

ビュルッ

ビュルッ

「んう
~~~~~  
つつつ!!!」



「ね、提督  
ぴゅっぴゅっ…手だけで  
い〜の?」

「手…  
おじいちゃん」

「もあ〜っつと♥  
ぴゅっぴゅっ…  
ぎせたいかも…♥」

「な・なら…  
一つ命令がある…」

「チュッ…」

「マァッ」

「…提督♥いっぱい♥  
おちんちんから出せて…」  
「えらいです♥♥」



「素肌にストッキングになれ  
なんて…  
意外に変態さんなのですね…」  
「う…うるさく」

「つ…つ…  
ローション…用意しておいて  
よかったあり♡提督に使って  
ほしいなつて、思ってたの♡」

「あ…♡  
めるめる…入ってきたあ  
提督♡…どうです…?」

「あ…  
テラテラして…  
や…やらしい…」

「つ…つ…  
うれし♡提督…  
気に入ってもらえましたか?」  
「あ…あ…♡」  
「つ…つ…♡」

「提督…  
これから…  
この穴を使って…  
おちんちんじゅぼじゅぼして…  
と奉仕しますね♡」  
「は」

「秘書官  
提督のお世話さ  
せ…ん…出来るちんこ  
……御座るんです」

「ど…をどうしたら…  
男の人が気持ちいいか  
わたし…わかるの♡」

「えっぎ、わたしの手で  
びゅっびゅっ♡したより…  
もっど…気持ちいいこと  
今から…しましようね♡」  
「あ…  
あれより気持ちいいこと…」

さっきの射精が  
今までで一番…  
気持ち良かったことなのに  
あれよりなんて…

「提督♡  
目がとろ〜んって  
してます…♡  
期待…してるの？  
うふふ♡」

「い…いいからっつ  
早く気持ちいいこと…  
しろっつ」  
「あん、このままじゃ  
出来ないわよ〜」  
「くっ!!!」

「あ…  
丸見えになっちゃった♡」

「もうっ  
出来るだろっ!!!」

ドキ

ドキ

「今までに  
経験したことない  
気持ち良さ…♡  
愛宕のせ〜んぶ使って」

「提督のおちんちんに  
経験させますね…♡」

ドキ

おちんちん  
おちんちん

おちんちん

おちんちん



「うっ  
うっ」

「うっ  
はっ」

ふああっなんだ  
これえっ!!!  
ちんこがっ  
おかしくなってるっ

「わっ♡ひっ♡ふっ♡」

「提督…♡  
目開けてえ♡」



「提督のお♡ん♡見えてるっ」



おちんちん  
おちんちん

びびる

「あ…あ  
あ♡♡♡あ」

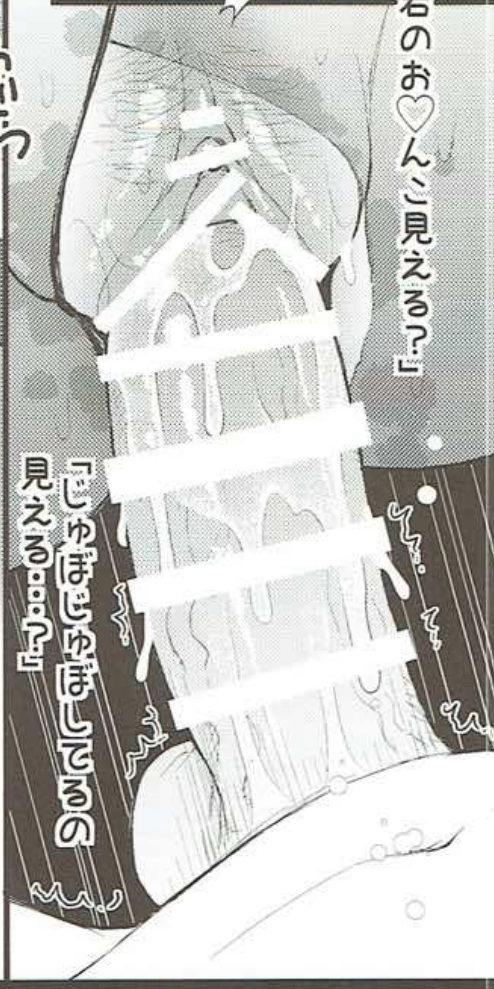
「おちんちん…  
蕩けちゃうっ」

「おちんちん…  
蕩けちゃうっ」

「おちんちん…  
蕩けちゃうっ」

「おちんちん…  
蕩けちゃうっ」

「おちんちん…  
蕩けちゃうっ」



「おちんちん…  
蕩けちゃうっ」

「おちんちん…  
蕩けちゃうっ」

「おちんちん…  
蕩けちゃうっ」

「おちんちん…  
蕩けちゃうっ」









「は……は……は……」

ははははは

ははははは

ははははは

ははははは

ははははは

ははははは

ははははは

ははははは

ははははは

ははははは

ははははは

ははははは

ははははは

「きもちいい♡」  
提督よりも  
お姉さんだから  
我慢してたのに……♡  
「いつちゃったあ♡」

「は……はあ……  
提督のこと……♡  
も……と……♡  
好きになっちゃおう♡」

後日

「ぼんぼかぼくん♡」

はい、愛宕からのプレゼント♡



「だせっ!!  
こんなん  
着れるか!?!」

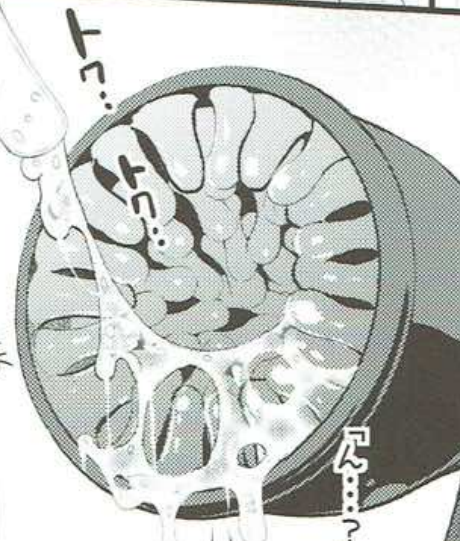


「んもう  
よく似合って  
かわいいのになー」  
「かわいいうって言うなー!」  
「だと思ってる...」  
「実はもう一つ  
プレゼントがあります♡」



「おちんちんの先っぽを  
これでしゅりしゅりして  
くりんくりんって  
したら...♡」  
「すこしく...♡」  
「気持ちいいかも...♡」

「男の子でも...  
何もなくて...  
じくっと寝ても...  
わたしが動かして...  
気持ちよくて...  
おちんちん蕩けちゃうの♡」



「提督♡」

「今夜は...♡」

「じゃあ...♡」

「わたくしが♡」

「提督を蕩けさせてあげます♡」

「...♡...♡...♡」



なんなんだ、あの道具は  
愛宕の顔を見ながら、香りをかぎながら、あの指であんな道具  
動かされたら……

多分、僕何度も…みっともなく…果ててしまうだろう。

違う。こんなはずじゃない。  
僕は頭が良くて、人の上に立つ男で

そうなのに  
そのはずなのに……

早く、夜が来ないかな  
今夜も…きっと

愛宕が僕を甘やかさせて虐めて蕩けさせる。

